

図書館ニュース



「若者の読書離れ」

学長 瀧上 凱令

「読書離れ」が深刻になっていると世間では言われています。しかし、世間で言われているからといってそのまま信じる訳にはいきません。私の専門は心理学です。心理学は確かな証拠に基づいて物事を考えるというのが基本です。そこで、読書離れは本当なのか調べてみました。信頼に足る資料はあまりありませんが、毎日新聞社から『読書世論調査』という報告書が毎年刊行されており、1983年版から2014年版までは、一部を除いて、今でも手に入れることができるということが分かりました。1973年版は甲子園大学の図書館にありました。『読書世論調査』には、一般人を対象とした「読書世論調査」と、小・中・高校生を対象とした「学校読書調査」の結果が載せられています。1983年版には1982年以前の結果も一部ですが載っています。

「読書世論調査」を見てみましょう。1年ごとの数値だとばらつきがありますから10年間の平均で見ました。書籍（単行本、文庫・新書本）を読む人の割合は、1964年から1973年の平均は46%、2004年から2013年は51%で、むしろ増えています。雑誌を読む人は、66%から58%に、新聞を読む人は90%から72%に減っています。新聞については、2004年から2010年の結果を見ることができなかったのも、2011年から13年の3年間の平均です。この結果からは、新聞・雑誌を読む人は減っているが、本を読む人は減っていないということになり、読書離れは見られないということになります。しかし、これは10代後半から70代以上を含めた全体の結果です。全体は減っていないくても、若い人は本を読まなくなっているのではないかと考えられます。

そこで、「読書世論調査」の10代後半（16歳～19歳）の結果を見てみました。10代後半で本を読む人は、1964年から10年間の平均は72%、1974年から83年は60%、2012年は46%、2013年47%で、確かに読書離れが進んでいるとみるこ

とができます。なお、20代は2013年65%で、全年代で本を読む割合がもっとも高いという結果でした。

「学校読書調査」を見てみましょう。「読書世論調査」とは調査の仕方が違いますから両者の比較はできません。1か月に1冊も本を「読まなかった」小・中・高校生の割合は1980年代から90年代半ばにかけて増え、90年代後半にピークに達します。この調査の「本」は教科書・学習参考書・マンガ・雑誌や付録を除いたものです。その後、小・中学生では本を読まない児童・生徒は減り始め、とくに2002年以降は大きく減ります。これは2001年に制定された「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づく施策や学校・図書館関係者の努力の結果のように思えます。問題は高校生です。本を読まない高校生は1972年44%、82年56%、92年60%、2002年56%、2012年53%、2013年45%で、90年代は60%台でしたからそれよりは改善されていますが、やはり半数位の高校生は本を読んでいません。1か月に読んだ本の冊数を1973年と2013年で比べると、小学生は4.5冊から10.1冊、中学生は2.3冊から4.1冊に増えています。高校生は1.8冊から1.7冊で変化はありません。

「読書世論調査」からは、10代後半は昔に比べて本を読まなくなったということが分かりました。10代後半には短大生も含まれています。「学校読書調査」からは、小・中・高と年齢が上がるに従って本を読まなくなることが分かりました。これをまとめて「若者の読書離れ」といってもいいのではないのでしょうか。

読書は知識や言葉のレパートリーを増やすための重要な手段です。豊かな知識と豊かな言葉はコミュニケーションに欠かせません。しかし知識と言葉には、考えるための道具というもう一つの重要な役割があります。読書は知識と言葉を増やすだけでなく、考える力を養うためにも不可欠なものです。ぜひ、本を読む習慣を身に付けていただきたいと思います。

「聖武天皇と光明皇后－正倉院とゆかりの品々－」

杉本 一樹氏(宮内庁正倉院事務所長)

平成26年
9月27日(土)
開学50周年記念
附属図書館
公開講座より



本講演では、聖武天皇と光明皇后という視点から、正倉院に伝わる宝物の概要を紹介した。具体的な事例としては、とくに、開催を控えた第66回正倉院展展示品目から選び、その見どころの紹介も行なった。

756年に聖武太上天皇が亡くなった後、光明皇后が四十九日にあたる6月21日に、天皇の冥福を祈って東大寺の大仏に品物の奉献があった。奉献のさいには献物帳と称する目録が添えられ、献納の趣旨を記す願文のほか、列挙された多数の品目の一つずつに詳細な記述がある。前後5回にわたる献納品が正倉院宝物の中核をなしている。このほか、752年の東大寺大仏開眼会をはじめ、東大寺の什宝も正倉院に伝わる。全体としては種類も分量も多く、概観するためには用途別や技法別、材質別といういくつかの観点が有効である。

第66回展では、調度、武器武具、書籍・地図、楽器・楽舞具などの分野が目される。

宮廷の調度は、聖武天皇に直結するものもある。また聖武天皇は篤く仏教に帰依したので、仏教儀式の中で使われた正倉院宝物は、宮廷の調度を考える上で参考になる。最も知名度の高い宝物の一つ、鳥毛立女屏風(とりげりつじょのびょうぶ)については、昭和60年に解体修理を行なった際の調査で、画面の絵を書いた紙が、実は使い古しの文書の反古が使用されていることがわかり、製作場所(日本製)と時期の絞り込みができた。このほか、紫檀木画挾(したんもくがのきょうしやく)や、天皇・皇后の使ったベッドである御床(ごしょう)を紹介した。本体だけでなく破損の進んだ付属品も伝わる点は正倉院らしい。



【左図】鳥毛立女屏風
[とりげりつじょのびょうぶ]
(鳥毛貼りの屏風)
(第4扇・部分)

【下図】紫檀木画挾
[したんもくがのきょうしやく] (ひじつぎ)



また、両陛下のお祝いに因み、古代に年始の贈答に使われた人勝(じんしょう)、聖武天皇が大仏開眼会の時にはいた革製の靴を紹介した。靴の形に合わせて底を少し掘りくぼめた容器の工夫のように、大らかさときめ細かさが併存するところや、箱・献物几類の多様な材質・技法・デザインに天平の気分が感じられる。海獣葡萄鏡の鑄造技法は、非常に高い水準にある。

1957年、東京生まれ
1979年、東京大学文学部卒業。
1983年、東京大学大学院修了。
宮内庁正倉院事務所所長・文学博士
著書「日本古代文書(もんじょ)の研究」吉川弘文館、2001年
「正倉院 歴史と宝物(ほうもつ)」中央公論新書、2008年 他



【左図】衲御礼履
[のうのごらいり]
(儀式用の靴)



【右図】鳥獣花背方鏡
[ちようじゅうかはいの
ほうきよう] (海獣葡萄鏡)

藤原仲麻呂(恵美押勝)の乱から1250年目に当たり、武器武具も多く出ている。献物帳に記載がある御杖刀の優れた作行きや、弓矢、長刀の源流といわれる手鉾(てぼこ)を紹介した。全文、藤原仲麻呂が自筆で書いた東大寺封戸処分勅書(ふこしょぶんちよくしよ)をはじめ、非常に格調の高い梵網經(ぼんもうきょう)や、鑑真和尚が中国から携えてきた経巻である四分律(しぶんりつ)など、書は、書き手の精神的なものをよく映す。

【左下図】東大寺封戸処分勅書

[とうだいじふこしょぶんちよくしよ] (封戸の用途区分を定めた勅書)



【上中図】崑崙[こんろん]



【上右図】酔胡従[すいごじゅう]

楽器・楽舞具では、修理を終えた伎楽面がある。崑崙(こんろん)は、半獣半人、悪役だが憎めない。酔胡従(すいごじゅう)は、酔ったペルシャの王様に付き従う従者。鼻と耳が取れていたのを修理で付けた。この二面は、桐の材を彫刻したものである。もう一つの酔胡従は、麻布と漆を用いる乾漆(かんしつ)技法で作られる。折れ曲がった鼻を修理して、元の形に戻った。

楽舞に関連した衣裳には、上着・下着、靴下などがある。衣裳をまとめに包んだ風呂敷まで残るのも正倉院らしい。

楽器では阮咸(げんかん)を挙げる。見所は、胴の中心、皮貼りの捍撥(かんばち)に描かれた絵。隠者が三人。囲碁の情景である。もう一つは、二つの丸。赤外線で見ると出てくる二つの画像がある。一つは、丸の中に三本足のカラス、もう一つは木を中心にヒキガエルとウサギ。太陽と月の象徴である。さらに、中国でごく短い間だけ使用された則天文字の「日」「月」の源流も、この形にあるだろう。

以上、正倉院宝物は、東アジア世界の広がりや天皇から庶民まで幅広い階層にわたる社会のなかから、8世紀を中心とする時期を切り取って今に伝えるものである。

「紫式部と藤原道長の栄華」

朧谷 寿氏(同志社女子大学名誉教授)

平成26年
10月4日(土)
開学50周年記念
附属図書館
公開講座より



1939年、新潟県生まれ
1962年、同志社大学文学部卒業。
平安博物館助教授、同志社女子大学教授を経て、現在、同志社女子大学名誉教授。
2005年京都府文化功労賞受賞。
著書「藤原道長」ミネルヴァ書房、2007年
「王朝と貴族」集英社、1991年
「藤原氏千年」講談社、1996年
「源氏物語の風景」吉川弘文館、1999年 他

摂関時代の頂点を極め、「望月の歌」で知られる藤原道長(966～1027)には『御堂関白記』と呼ばれる日記が京都の陽明文庫に架蔵されています。これは日本に残る最古の自筆日記として重要です。2013年にユネスコの記憶遺産に登録されたので、ご存知の方もおられることと思います。

道長の娘で一条天皇の中宮となった彰子に仕えたのが紫式部です。彼女の手になる『源氏物語』の主人公(光源氏)は賜姓皇族(皇親賜姓)で、これは姓を賜わって臣下となった皇族を言います。『源氏物語』の冒頭の「女御、更衣あまたさぶらひ給」うことで皇子女の数が膨らみ(嵯峨天皇の皇子女は50人、醍醐天皇は35人)皇室財政が逼迫する、その防止策としてとられた制度なのです。それにはルールがあって身分の低い妃の子女から臣下としています。賜姓皇族で源姓を賜わると賜姓源氏、平姓ですと賜姓平氏…と言いました。

妻2人とも賜姓源氏から得ている道長は、きっと尊貴性に目を付けたのではないのでしょうか。つまり臣下の藤原氏が婚姻を通して家格を高める、という思惑があったと考えます。1人は宇多源氏の倫子、もう1人は醍醐源氏の明子です。道長は摂関藤原兼家の五男、同腹に限っても2人の兄がいました。長兄が道隆です。その娘の定子は一条天皇の中宮となって敦康親王を産んでいます。この親王は第一皇子でしたから東宮を経て天皇になれる人でしたが、後見人となるべき祖父である関白道隆が43歳で死去したことで可能性は弱まり、母も24歳で亡くなり、その道は閉ざされました。

長兄のあと関白となった次兄の道兼(35歳)は流行病に捕まり10日余りで亡くなります。働き盛りの2人の実兄が相次いで世を去り、病弱の道長が生き残ったのです。しかも兄のみならず上席のほとんどの公卿が疫病で命を落としました。道長は強運と言えるでしょう。政権のトップに躍り出た道長は、12歳の娘の彰子を一条天皇に入れて強引に中宮に押し上げ、ひたすら皇子の降誕を待ちます。そして9年後に幸運にも皇子が誕生するのです。

寛弘5年(1008)7月、出産を控えた中宮彰子(21歳)は生まれ育った道長の土御門殿に里下がりします。紫式部(30半ば)以下多くの女房が付き従ったことは言うまでもありません。出産を中心としたこの邸での情景は「秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし」で始まる『紫式部日記』に詳しいです。1万坪に近い広さを誇る土御門殿は、平安京の東北部の高級住宅域の一郭にありました。そして、ここは天皇になった道長の3人の孫が誕生するなど道長の栄華の

舞台となったところです。2ヵ月ほどして無事に皇子(敦成親王)が生まれます。その部分は『御堂関白記』の自筆本が残っていますので、道長(43歳)の喜びが行間から伝わってきます。1ヵ月後には一条天皇(29歳)が皇子と対面のため、この邸に行幸して参ります。この日に備えて道長は龍頭鰐首の船を新調しています。これを釣殿から眺める道長の姿が『紫式部日記絵巻』に見え、道長の絵画資料としては最古と思います。彰子は次の年にも皇子、敦良親王(後朱雀天皇)を産みますので、道長の栄華形成の最大の貢献者と言えるでしょう。

一条天皇が32歳で崩御し、東宮であった三条天皇が即位し、敦成親王が東宮となります。この段階で道長は1日も早い外孫(東宮)の即位を考えたことでしょう。眼病に苦しむ三条天皇を圧迫して5年余りで譲位に追い込みます。こうして9歳の後一条天皇が出現します。さらに道長は、この天皇に彰子の妹で20歳の威子を入れますが、今なら法律で認められない叔母と甥の結婚です。そして7ヵ月後に威子は皇后に立ちます。その立後の儀が寛仁2年(1018)10月に内裏で行われ、夕刻から再建間もない道長の土御門殿に場所を移して盛大な祝宴が持たれました。

藤原実資は『小右記』に「一家で三后を独占した例がない」と記していますが、この時以外に例はありません。因みに三后とは太皇太后(長女の一条天皇中宮彰子)、皇太后(二女の三条天皇中宮妍子)、皇后(威子)を指します。すべて我が娘で独占したのでから、酔いに任せて道長が「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたる事も無しと思へば」と詠んだのも無理からぬことでしょう。詠歌にいたる道長と実資のやり取りは日記に詳しいのでぜひ味わってほしいものです。

紙数の関係で当日の話題のほんの一端を要旨的にご紹介しました。

文化庁監修『国宝』2・絵画Ⅱ 毎日新聞社発行
紫式部日記絵詞(藤田美術館)第六段
「新造の龍頭鰐首を見る道長」より



号数	発行年月日	巻頭タイトル	著者
No.1	1977. 9.10	発刊に寄せて	斎藤 睿寿
No.2	1977.11.10	1冊の本との出会い ーそれが学問研究の出発点になるー	斎藤 睿寿
No.3	1978. 1.10	図書館の運営システム工学	斎藤 睿寿
No.4	1978. 3.10	図書館のメンバーとしてー 卒業生に贈る言葉	斎藤 睿寿
No.5	1978. 5.10	歴史を勉強しよう	斎藤 睿寿
No.6	1978. 7.10	三冊の詩集	井上 桂子
No.7	1978. 9.10	深く心に残る言葉を大切に	斎藤 睿寿
No.8	1978.11.10	この頃思うこと	津田小夜子
No.9	1979. 1.10	「寒山」の笑い	和中孝一郎
No.10	1979. 3.10	卒業生に贈る言葉 読書することは、新しいことを知るだけで なくて、思想・土台造りをするのである。	斎藤 睿寿
No.11	1979. 5.10	ー新入生を迎えてー 図書館と大学生活	斎藤 睿寿
No.12	1979. 7.10	わたしの自画像	小椋 美幸
No.13	1979. 9.10	私の場所	福 知栄子
No.14	1979.11.10	本は読まれて本になる	川澄 健一
No.15	1980. 1.10	「自然」に教えられるもの	平野 静子
No.16	1980. 3.10	ー卒業生に贈る言葉ー 血や肉になる価値のある本を求めて読 むようにして欲しい。	斎藤 睿寿
No.17	1981. 6.20	心を結ぶ図書館にしよう	斎藤 睿寿
No.18	1981.10.20	読むこと 考えること	斎藤 睿寿
No.19	1984.11.23	図書館ニュース再発行にあたって	斎藤 睿寿
No.20	1985.11.25	雑感	斎藤 睿寿
No.21	1986. 3.15	ー卒業生に贈る言葉ー “小さなライブラリー”を	久米多香子
No.22	1987. 1.14	私の人生を決定したもの	海邊 忠治
No.23	1988. 1.14	読書は何故必要か	海邊 忠治

号数	発行年月日	巻頭タイトル	著者
No.24	1989. 1.14	長編小説のすすめ	久米多香子
No.25	1990. 1.14	図書館と私	壺阪美智子
No.26	1991. 1.14	読書・趣味か努力か	榎原 猛
No.27	1992. 1.14	私の読書実験	榎原 猛
No.28	1993. 1.14	訪書こぼればなし	湯浅 清
No.29	1994. 1.14	骨折得(ほねおりどく)	榎原 猛
No.30	1995. 1.12	蜜柑で「世界」を買った話	榎原 猛
No.31	1996. 1.12	短大図書館 震災復旧顛末記	湯浅 清
No.32	1997. 1. 8	閉館時刻	榎原 猛
No.33	1998. 1. 8	私の、この一冊を求めよう	久米 利男
No.34	1999. 1. 8	本に囲まれて	加地 伸行
No.35	2000. 1.11	“人の知恵は顔に光を添え、固い顔も 和らげる(8・1)”	田中 國夫
No.36	2001. 1. 9	「書物」との出会いについて考える	木下 繁彌
No.37	2002. 1. 7	青少年の「読書離れ」について考える	木下 繁彌
No.38	2003. 1. 7	或る少年の物語 ーなつかしくもあり、悲しくもありー	木下 繁彌
No.39	2004. 1. 7	「一隅を照らす」について考える	木下 繁彌
No.40	2005. 1. 7	戦後教育60年に思うこと	木下 繁彌
No.41	2006. 1.24	自己表現と読書	西村 健
No.42	2007. 1.18	誰にも読まれない本	西村 健
No.43	2008. 1. 7	本の記憶	西村 健
No.44	2009. 1.16	読書という営みとは	松嶋 隆二
No.45	2010. 1. 9	図書館便り	松嶋 隆二
No.46	2011. 1. 7	図書館のはじめ ー石上宅嗣と芸亭ー	木本 好信
No.47	2012. 1.31	律令国家の図書寮と藤原仲麻呂	木本 好信
No.48	2013. 1. 7	本と出会う	瀧上 凱令
No.49	2014. 1.10	絵巻物で調べる	瀧上 凱令
No.50	2015. 2.20	若者の読書離れ	瀧上 凱令

図書館随想 「大変な、そして懐かしい回想」…………… 岩本 次郎(元教授)

私は平成2年3月から同12年3月まで日本文化科に在籍し、その後4年間、非常勤講師として教壇に立たせていただいた。この間の最大の出来事は、阪神・淡路大震災であった。7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部一帯に未曾有の大地震が走った。奈良に在住の私もその強烈さを体感して、気を急きながらも甲子園口へと向かったが、難波から先へは行けなかった。

その後、登学して目の当たりにした状況については敢えて割愛するが、図書館では、配架されていた図書のほぼすべてが書棚から落下していた。後日、久米多香子副学長先生(現特別顧問先生)を筆頭として、湯浅清先生、八木良夫先生、司書の名倉さんらが中心となり、何日もかけて、番号順に整理された。

大変な重労働であったと思われるが、今更ながら頭の下がる思いがするのである。

次いで、図書館に関しての思い出としては、辞典類が並ぶ棚の前で、湯浅清先生をよくお見かけしたことである。高僧明恵の母方のご子孫であり、連歌師心敬の研究者として著名であった。幽明境を異にされたと聞かすが、ご冥福をお祈りする次第である。

私は図書、ことに古書の匂いが大好きである。研究室での仕事に倦むと、図書館に行き、どの本を探すともなく、書架に挟まれて、よく背表紙を眺めたものである。図書館を癒しの場と心得るなど叱られそうですが。

図書館随想 「読書と図書館を巡る追憶」…………… 南 徹弘(元図書館長)

私はもともと本好きではなかった。ただ、田舎の町の繁華街の近くで育ったため、子どもの足で10分以内に本屋が5、6軒もあり、ある本屋で子どもの雑誌を読み、店員に追い出されると次の書店に行って続きを読み、何周かするうちに数冊を読み終えて夕方になって帰宅することが多かった。

小学校高学年の頃には、ほとんど毎日、下校時に少し寄り道をして貸本屋に寄ってルパンとホームズを借りて読んでいた。友人を誘って、同じ料金の貸出し期間内に2、3冊を回し読みすることもあった。ホームズの謎解きと証拠を積み重ねて実証するという構成には今でも興味をもっている。ホームズ・ストーリーの持つ論理性は私の中では現在でもその輝きと魅力を失っていない。ホームズ作品は、現在でも、TV放映がなされており、番組表で見つけたらともかく録画している。

中学校には小さいながらも図書室があり、入口近くに偉人の伝記や国内外の文学作品が天井近くまで並べられていて、中学

校入学後の最初の強い印象は、図書室にあった。夏休み中にすべての伝記などを読み尽くそうと、毎日、片道40分近くを歩いて学校図書室に通い、閉室時間まで夢中になって過ごした。週末には貸出し限度まで借りて、夜遅くまで読んでいた。このような夏休みを過ごし、結局、書棚の全てを読み尽くすことは出来なかったが、おそらく100冊に近い本を読んだかと思う。

9月に入り夏休み中の個人別の貸し出し冊数が図書室に掲示された。3学年を通して1位と2位は1年生であった。私は、1位から数冊少なく2位であった。1位は、同じクラスの友人で、その後、彼とは同じ高校に進学しクラスもほとんど一緒に3年間を過ごした。彼は、国立大学の哲学科に進学し、卒業後は定年まで国立大学図書館で司書として勤務した。彼こそ、無類の読書家・本好きというべき人であると、同窓会などで会うたびに密かに懐かしく思い出す。

図書館随想 「神戸大倉山の神戸市立図書館の思い出」…………… 直木 孝次郎(元教授)

図書館といえば、出身大学の図書館や、勤務した大学の図書館を思い出すが、それ以外で思い出すのは、私の故郷の神戸市の大倉山公園にある市立図書館である。よく入館したのは中学三、四年のころで、通っていた神戸の中学の帰りに、友人数人と立ち寄った。

当時、昭和八、九年ごろは私の通っていた中学は神戸の東部を流れる生田川の岸边にあり、私の家は神戸の西部の湊川に近く、東西三キロ余り離れていた。大倉山はその中間西寄りにある丘で、私の家から徒歩十五分ぐらいかかる。家から中学までは市電に乗れば早く行けるので、登校する時はそれを利用したが、帰りは同じ方面へ帰る友人数名といっしょに歩いて、図書館に寄ることが多かった。一つの机をかこんで腰かけ、宿題のわからない所をこっそり教えて片づけて帰るのである。宿題が早くすめば、むずかしい高等数学の本を借り出して読むような、特別に頭のよい友人がいたが、私は勉強に飽きると、図書の貸し出しの手続きをするカウンターの横にある新着図書の棚をみて、おもしろそうな本を借り出すことがあった。

ある日、その棚に木本順司著『万葉集入門』という本があったので、深い考えもなく借りた。私はそのころ俳句を作りはじめていたが、それより少しまえ国文学者の沼波瓊音著『俳句講話』という本を借りたら、案外おもしろい。俳句のつぎは和歌だと考えて借りたのだろう。

さてその『万葉集入門』をひらくと、第一ページに『万葉集』

の代表作としてつぎの二首が掲げてあった。

我はもや安見見えたり 皆人の
えがてにすといふ安見見えたり 藤原鎌足
笹の葉は深山もさやかにさやげども

我は妹思ふ別れきぬれば 柿本人麻呂

何の予備知識もない中学生にもよくわかる歌である。本歌取りや掛け詞を知らなければ理解できない『古今集』や『新古今集』よりずっとやさしい。日本でいちばん古い歌集がこんなにわかりよいとは、新鮮な驚きであった。

それで『万葉集』に親しみを覚え、関心が高まったが、すぐに『万葉集』の勉強を始めたわけではない。中学時代(当時五年制)に読んだ本は、佐佐木信綱の『万葉読本』や斎藤劉の『万葉集名歌鑑賞』くらいである。それでも、旧制高校へはいるまでの浪人中には、島本幸彦の『万葉集の鑑賞と其批評』その他を読み、念願の旧制一高に入学してからは、学校の国文学会にはいり、のちに万葉学者としても有名になる大野晋君と親交を結んだ。

その後私は日本古代史を専攻するようになるが、『万葉集』への関心は衰えず、『夜の船出-古代史からみた万葉集-』(塙書房)、『万葉集と古代史』(吉川弘文館)・『額田王』(同左)などの研究を発表した。そのように私が『万葉集』研究の道にはいったのは、神戸市立図書館のおかげである。図書館とはありがたいものだ。

図書館随想 「官兵衛余話」…………… 山根 邦雄(元図書館長)

私たちの身近には、生き方が素晴らしいとか、性格が大変良いとか、その人の業績を高く評価できるといった理由で好意を寄せることができる人がいる。歴史上の人物にも同様のことが言えると思う。

現在NHKの人気の大河ドラマ「軍師官兵衛」は、私が好意を寄せる歴史上の人物である。官兵衛については、国民的作家の司馬遼太郎が「播磨灘物語」の中で鮮明に描いているので、読まれた方も多いと思う。もし私が官兵衛の境遇にあるなら彼のように生きてみたいと思う。官兵衛は、信長や秀吉のように権力の座に座ることはなかったが、乱世の中に身をおき、播磨の小豪族、小寺家の家老から身を興し、筑前52万を領する大大名に出世した。その過程で秀吉の手足となり、敵対する勢力との戦いに明け暮れた。三木の別所長治、鳥取の城主の吉川経家、備中の清水宗治等を兵糧攻め、水攻め、また巧みな外交で屈服させている。官兵衛は武士でありながら人殺しを嫌い、説得と

が外交で敵方を自陣営に加えることを選んだ。彼は、若い頃に信長に会い、信長の人材登用のやり方、鉄砲の導入、常備軍設置などの当時としては革新的手法を高く評価して、信長や秀吉の家来になり、信長の播磨制圧に手を貸した。官兵衛は、新聞やテレビのない時代に情報を集め、小藩の生き残りを賭けて必死の努力をしたと思われる。

戦乱に明け暮れた生涯であったが、官兵衛は秀吉の晩年に政治の第一線から退き、如水と名乗り隠居し、仲間と共に和歌とが連歌を楽しんだ。戦国時代の武将には珍しく若い時の母親の影響が和歌、漢籍の素養に恵まれ数々の名言を残している。最後に私の好きな彼の辞世の句を紹介したい。

“おもひおく 言の葉なくてついに行く

道はまよはじ なるにまかせて”

(この世に思い残すことは、もう何もない。

今は迷うこともなく心静かに旅立つだけだ。)

図書館随想 「読書はさまざまな価値観との遭遇！」…………… 和辻 敏子(特任教授)

私が本学に参りました当時(昭和55年)の図書館は現在の書庫にありました。

入学時のオリエンテーション中には、図書館ガイダンスがあり、新入生と共に「偲び草」(故甲子園学院院長 久米長八先生の追想録)を読み感動したことが思い出されます。

日本文化科が開設するに当たり、昭和63年4月、図書館は2倍に拡張されました。そして二階に新しい閲覧室が作られ、一階は書庫となり現在に至っております。

その頃(1980年代)は未だインターネット利用など出来ない時代でしたので、本、文献や資料などの検索は、カード(書籍名、著者、発行所などが記載されている)を一枚ずつ繰りながら行っていました。その為に現在とは比べようもない時間と労力が要しました。

コンピューターやスマホに馴れている現在の学生には、想像できないことでしょう。全国大学生協連が30の国立、私立大学の約9千人を対象に、一日の読書時間を調査した結果、読書時間が0と言う学生が4割を超えたと言うショッキングなニュースが報じられました。

恐らく学生たちには、スマホなどインターネットを駆使して幾らでも情報が入手できるので、本を読む必要がなくなってき

ているのかもしれませんが。

しかしながら、これらの情報メディアでは、断片的な情報しか得られることが出来ません。

本を読むことにより本の内容以外に、著者の人物像やポリシーなど色々な情報を感じ取ることが出来るのです。

学力の土台となるのは言語能力であると言われており、その言語能力を育てる最も効果的な方法は読書することであると考えられます。

また、本を読む事により、知的能力を啓発し、自己の希望を切り拓く有効な手段であるとも言われています。

このように本から学べることは計り知れない多いものがあります。その為には本をただ受身の状態で読むのではなく、能動的に読むように努めなければなりません。

その本から「何を学び」そして自分に「どのように取り入れて生かしていくか」を読み取り実践していく行動力がキーポイントになります。

そして更に、本を通して多種多様な価値観との出会いがあり、おのずから判断力や思考力が養われていくことでしょう。

様々な本を提供してくれる図書館は人生の宝庫であり、生き方を模索する発信基地と言えるのではないのでしょうか。

特集 「記念号によせて」…………… 本本 好信(図書館長)

本学は今年2014年で開学50周年を迎えました。これを記念して附属図書館でも、昨秋に公開講座を2回にわたって開催いたしました。この詳細につきましては、本号にも特集記事を組んでいますので、こちらをご覧ください。

さて、「図書館ニュース」も本号をもって50号という区切りを迎えましたが、開学50周年ですから「図書館ニュース」も年刊でちょうど50号かとお推察される方がたもおられるかもしれませんが、じつはそうではなく偶然の一致なのです。でも、50周年に50号、記念としてはとてもよいめぐりあわせです。

ちなみに「図書館ニュース」創刊号は、昭和52年9月の発刊、B5判大で、頁数は4頁、斎藤壽学長の巻頭言「発刊に寄せて」などの記事が掲載されています。その後、平成20年1月発刊の43号からは、A4判大・8頁、44号からは二色刷りの8頁というように体裁が変わり、内容も一層充実したものになっています。

ところで、この「図書館ニュース」50号の「記念号に寄せて」との原稿依頼をうけてみて、自分はこれまで何回か執筆していますが、どのような内容のことを書いているのだろうかと思いました。だいたいのことしか覚えていません。そこで図書館でバックナンバーをみて確認してみました。本学に着任の年、平成13年1月発行の36号に「自著は、研究者の証」などと生意気なことを書いて以来、43・44・45・49号で「自著を語る」を、46・47号の巻頭言で図書館の歴史について書いています。

いずれにしても、この「図書館ニュース」、原稿集めから編集・校正、印刷所との交渉など、すべて司書の猿丸恭子さんが担当しています。猿丸さんがいなければ、この50号の記念号の発刊も難しかったことは間違いありません。

とりとめのないことを書いて、どうか責を果たすことができました。

特集 「当世図書館事情」…………… 猿丸 恭子(司書)

「ゆりかごから墓場まで」。これは本来、社会保障制度の充実を形容する言葉ですが、図書館にもあてはめることができます。たとえば、子どもが生まれて命名する時、「姓名判断」の本を借りる人がいます。身内が亡くなり、「遺産相続について」や「戒名の付け方」の本を借りる人もいます。本学の学生にも、小学校の頃に夏休みの宿題を調べたり、中学や高校の頃に図書館の学習室で勉強をした経験を持つ人がいると思います。産まれて「ゆりかごに入って」から、亡くなって「墓場に入る」まで、人生の様々な場面で図書館は活用されています。(残念ながら「短大で初めて図書館を利用した!」と言う学生もいますが…)

日本の図書館は①国立国会図書館・②公共図書館・③大学図書館・④学校図書館・⑤専門図書館の5つに分類されています。各図書館は、年齢も目的も異なる利用者に対応するため、多種多様な本を集めています。最も多岐にわたって本を集めているのは、①の国立国会図書館で、「納本制度」に基づき収集しています。

「納本制度」とは、図書等の出版物をその国の責任ある公的機関に納入することを発行者等に義務づける制度のことです。わが国では、国立国会図書館法(昭和23年法律第5号)により、国内で発行された全ての出版物を、国立国会図書館に納入することが義務づけられています。

-リーフレット「納本のお願ひ(民間出版物)」より-

ここでの出版物とは、頒布を目的として発行されたもの全てで、図書・雑誌・新聞・CD・DVD・ブルーレイ・レコード・楽譜・地図などが対象です。納本された出版物は、国立国会図書館の蔵書検索・申込システムである「NDL-OPAC」に書誌データが掲載され、インターネットを通じて検索したり、貸出や複写の依頼ができます。利用する場合は、本学図書館を通じて申し込むか、「個人の登録利用者」になる必要があります。登録利用者になれば、東京本館(東京都)・関西館(京都府)・国際子ども図書館(東京都)を来館せずに利用できます。登録料は無料、貸出送料や複写料金などの実費は個人負担となります。

(詳細は以下のホームページ参照)。

<http://ndl.go.jp/jp/information/guide.html>
「登録利用者制度のご案内」

②の公共図書館で、最近注目を集めているのが「ビジネス支援サービス」です。図書館とビジネスの関係は深く、ゼロックス(コピー機)やボラロイドカメラの創業は、アメリカのニューヨーク公共図書館が大きな役割を果たしました。創業者が図書館で資料を読み、文献を探してアイデアを得たエピソードもあります。

日本の公共図書館にも貸出だけでなく、利用者の情報検索を手伝う「レファレンス(調査相談)」というサービスがあります。「〇〇の本はどの棚にあるの?」「〇〇の作り方を調べたい」など、個人の知的好奇心を満たす学習や娯楽を目的とした質問、相談が多くを占める中、下記のように利用者がビジネス支援サービスを受け、起業するケースも報告されています。

シャッター用防災機器の開発をした会社が、製品開発や起業の経験がないため、商工会議所等の窓口で取り合ってもらえなかった。地元の鳥取県立図書館に相談すると、技術レポートや台風の被害状況、産業技術センターや弁理士等の紹介に至るまで様々なサポートしてくれた。その結果起業ができ、製品はグッドデザイン賞を受賞した。

(平成20年度全国図書館大会記録より抜粋)

佐賀県にある武雄市図書館では蔦屋書店の併設により本の購入、CD・DVDの有料レンタルが可能で、館内に設置されたカフェ(スターバックス)でコーヒーを飲みながら本を読むことができます。(本を汚した場合は、買い取りだそうです…) 賛否両論はありますが、来館者数は増加しているそうです。

③の大学図書館も変化しています。本は紙媒体だけではなく、電子図書も普及してきました。PCやスマートフォン、タブレット端末など、情報源も多種多様です。情報を正しく取得し、活用する方法を学生に伝えていく役割も担うようになりました。

大学生の読書離れも問題になっています。2013年秋に全国大学生協連が実施した第49回「学生の消費生活に関する実態調査」では、1日の読書時間が0の学生が調査開始以来、初めて4割を超え、社会的にも大きく注目を集めました。本学図書館では毎夏、1回生を対象に読書感想文を募集していますが、読書指導を行う大学は全国的にも増えてきています。時代の波に乗り遅れないよう、今後も進化していきたいと思っています。ご協力よろしくお願いいたします。

随 想 「宮城谷昌光著『晏子』より」…………… 池上 貴美子(特任教授)

20年程前、新聞の下欄に「中国の春秋戦国時代、人々が戦乱の世を騒がしく生きる中、斉の国で、御者に「ゆっくり、ゆっくり進めよ」と命ずる男がいた」のような本書の広告があり、ふと心惹かれて宮城谷昌光著『晏子』を求めました。以後、宮城谷昌光にはまり、『孟嘗君』『重耳』『太公望』『子産』『青雲はるかに』『介子推』『長城のかげ』『華栄の丘』『奇貨居くべし』等を読みました。

今回『晏子』を再読しましたが、主人公以外の登場人物が多く錯綜して覚えられず、読み進むのに苦心しました。しかしながら、主人公や敵対する登場人物の行動の背後にある心の動きを言葉で明確に説明し、一面的な善悪ではなく、心の在り方の「全体性」を示してくれること、自分の知らない多様な「人の生きかた」があり「広い世界」を教えてくれることに魅せられました。

『晏子』上巻の帯には「国が、君主が、権臣貴人たちが、陰謀をめぐらし、権力と利を求めて右往左往するなかで、(略)…軍事の才を発揮した晏弱將軍とその息子で斉の黄金時代を築いた晏嬰父子のみごとな生き方を激動と変転の歴史の中に描く…」と記されています。晏弱は君主に命じられて行くことになった断道の会で、君主を生かすための自分の使命は、無残に死ぬことに有ると考え決死の行動をとります。相手国の君主を非道に見せ、結果的に相手国を不利にさせるためです。しかし、その魂の座り方が相手国の要人に敬われ、逃がされ生き延びて帰ります。やがて君主に萊の国攻めを命じられますが、戦いではなく知と情で萊の国を平定します。また息子晏嬰は身長は小さい

(約130cm)ののですが、心は壮大で厳然としており、父亡き後、晋に攻め込まれた戦乱の巷でも、礼を全うして粗末な小屋の中で3年間の喪に服します。その姿は敵国の兵士にすら驚かれ感服されて逆に身を守られます。下巻の帯には「…思惑を秘めて暗躍し盛衰を繰り返す各名家の中で、そのいずれにも与せず、直言と覚悟を貫き通す晏嬰は次第に重きをなし、ついに宰相の地位に登る…」とあります。

晏子父子は、自分と君主という小さな二者関係を超えて、自分と君主と民(国：環界)という広い三者関係を心に抱きながら生きます。精神力と知性という強力な自我をもち、爽やかな生き方を貫く晏子の姿は、私の日常からはるかに離れた「(心の中では起こり得る)可能な世界」を教えてください。他の本の主人公も、過酷な状況下に生き、生涯をかけて周りの人と共に自分の道を創っていきます。

このように想像・創造の世界へと人を誘い、生き方の選択肢をたくさん示してくれる読書はやめられないと思います。



- ・「晏子」(新潮文庫・全四巻)
- ・宮城谷 昌光：著
- ・新潮社：発行
- ・一、三、四巻680円
二巻596円(定価)

推薦図書 「『マスターの教え』(ジョン・マクドナルド)」…………… 伊藤 弘顕(特任専任講師)

とても不思議な本です。この本には「成功者の秘訣」のようなものが書かれています。でも、いわゆる解説書だと思って読むと、期待を裏切られます。なぜなら、その秘訣が具体的に書かれていないからです。文字の量も少なく、とても薄いので、「あれ?もう終わったの?」と物足りない感じがすると思います。構成は物語になっていて、主人公がマスターと呼ばれる人を探し出して教えを受ける、という簡単なストーリーです。

そんな気軽さもあるって、ふとしたときに、私はこの本を読み返してみます。すると、読み返す度に新しい発見と学びがあります。なぜなら、マスターのすべての言葉や行動には様々な教訓や成功哲学が散りばめられているからです。「マスターはなぜこんな発言をしたのだろう?」と読むたびに疑問が浮かんで、印象に残ります。すべての教えが抽象的なので、自分で意味を考えながら読んでゆく必要があります。何年か時間が経ってから読んでみて、「なるほど、こういう意味かもしれない」と自分なりに気づくこともあります。未だに分からない部分もたくさんあります。完全に理解することはおそらくできません。でも、それで良いのだと思います。きっと一番大事なものは、答えを知ることではありません。自分で読んで感じたことを、自分の経験に当てはめながら、自分なりに解釈してみることで。そんな考えも、この本と長く付き合う中で教えられたように思います。

この本に限った話ではありませんが、本は一度読んだら終了ではなく、何度か読み返してみたいです。そのとき、ぜひ

自分の感じ方がどう変わったかに注目してみてください。そういう視点で読書をしてみるときっと面白いと思います。

また、最近、本を読む上で、本と自分の「心の距離」がとても大切だと感じています。難しい本や嫌いな本は、読もうとしてもその距離が遠くて気持ちが離れ、結局は中途半端にしか読んでいません。一方、自分のレベルにあった本や好きな本は、その距離が近くて身近に感じられるので無理せず読めます。その意味で、この本は内容がシンプルですから、どんな人にも気軽に感じられると思います。シンプルなのに深い意味が隠されている。それが格好いいので私はこの本が好きです。古典や数学などにも、シンプルな表現の背後に奥深い意味が込められているものが多くあります。この本はそれに近い類のものかもしれません。

私は、これからも気が向いたとき、この本を読み返してみようつもりです。みなさんも、一度この不思議な世界を体験してみてください。



- ・「マスターの教え」
- “富と知恵と成功”
をもたらし秘訣
- ・ジョン・マクドナルド：著
- ・飛鳥新社：発行
- ・1,000円(定価)

読書感想文優秀作

『からすたろう』

(八島 太郎 著／偕成社)

幼児教育保育学科 I 回生 1 組 掛水 美来

子どもが自分の才能を開花させるためには、周囲の大人が与える影響が大きく関係すると感じた。この本で主人公は良い師に巡り会えたことで、自らの才能を人に認められる。子どもにとって先生とはどんな存在であるか考えさせられる一冊だ。

後に「からすたろう」と呼ばれることになる変わり者の少年「ちび」、ちびは村の学校にあがった初めての日、教室の床下に隠れていた。そんなおかしなちびを周囲の子どもたちは避け、先生までも相手にしなかった。ちびが六年生になった時、いそべ先生という新しい先生が来る。そしてちびに学芸会で前に立つ機会を与える。そしてちびはそこでからすの鳴き真似をする。その声を聞いた人々はちびの住んでいる遠い場所を思い浮かべた。そして、かつてちびに酷くあつた子どもたちは涙を流し、大人たちもたいしたもんだと涙を流す。それからちびを悪く言う人もいなくなり、ちびは「からすたろう」と呼ばれることになる。

この本の中に、私自身共感できる所が多くある。私は何度も引越してきて、それが徐々にストレスになった。そして明るかった性格も中学生の頃には、根暗で人前に立つことも苦手な性格に変わってしまった。そんな私を変えてくれたのは高校時代の先生である。先生は私を演劇という道に誘い、生徒会にも入ることを勧めた。初めは苦痛でしかなかったが、次第に前に立つて発言することや、舞台上で自分を表現することの楽しさに気づき、卒業する頃には、周囲に多くの人がいて、生徒会長と呼ばれる存在になった。

子どもは誰もが才能を持っていると私は考える。その才能に自ら気づくことができる子どももいれば、誰かが手を差し伸べることで才能が開花する子どももいる。

教室の天井や机の蓋、窓の景色や虫。ちびは他の子どもが興味を持たないことでも面白いと思える子どもだ。それはちびの素晴らしい個性だ。さらに、ちびは勉強は苦手でも、野ぶどうや山芋がある場所、花のことなど多くのことを知っている。いそべ先生はそんなちびの才能に感心し理解した。

私は自分自身が保育者の立場に立った時、子どもの持っている才能や個性に気づき、引き出せるような存在になりたいと思っている。子どもたち一人一人の個性を大切に、子どもが自信を持って成長できるように支えられる先生になりたい。

ちびは毎日休むことなく学校に行き、卒業式にはクラスで一人皆勤賞を貰う。ちび自身の努力も人々の心を動かすきっかけとなった。

私は努力は他人に認めてもらうためや、褒めてもらうためにするものではないと考えている。自分自身の成長のために必要なことだと思うからだ。自分にとっては最大限努力したつもりでも、それが認められなかったり、当たり前だと思われたりする場合もある。しかし、子どもの場合は努力したことを認めてもらうことで成長することができる。その子どもの努力や、個性を押さえつけるのではなく、尊重し理解できるような保育者になりたい。

私自身がそうであったように、良い師との出会いは人生が変わるきっかけであるといえる。この一冊から先生という立場の在り方、自分を理解してくれる存在がいかに大切であるかを学んだ。

【評】 分かりやすく自分の言葉で感想が述べられています。からすたろうの「子どもらしく」のびのびと育つ一面と、「自分らしく」コツコツと努力する一面が具体的に紹介されています。掛水さんの体験から共感している内容が伝わり、保育士を目指す学生だけでなく、教員にとっても読みたい一冊として心に残りました。

課題図書紹介



今回、優秀作に選ばれた感想文課題図書「からすたろう」は1955（昭和30）年、今から59年も前に作られています。

作家の水上勉は

「この「ちびの物語」はもはや世界のえほんの古典だろう。学歴重点主義の日本の教育界でも、その親たちにも、ぜひこの本を読んで、子供の心の美しさを考えてほしいと思う。」と推薦文を寄せています。この絵本の主人公は、勉強がよくできる優等生ではありません。作者である八島太郎自身が、モデルだという説もあり、絵本の最後には、次のような記載があります。

この絵本を 磯長武雄、上田三芳の 恩師に ささげる

—この物語に登場する磯辺先生は、この恩師二人の想い出をあわせてつくったものである。磯長先生は支那事変の上海上陸戦でいち早く戦死され、上田先生は八十歳をこえて今なお御健在ときくが、当時はまだ二十歳をいくらか出ていない若い先生であった。

1979年3月12日 八島太郎

八島太郎とは、どのような人物だったのでしょうか。以下に略歴を紹介しますが、絵本から想像しにくい波乱万丈な人生だったようです。著書の「からすたろう」「あまがさ」は本学図書館でも所蔵しています。ぜひ一度、目を通してみてください。

●八島太郎（やしま・たろう）

1908（明治41）9.21～1994（平成6）6.30

画家、絵本作家。本名・岩松惇（いわまつ・あつし）。

鹿児島県根占生まれ。軍事教練を拒否して東京美術学校（現・芸大）を退学。昭和初期のプロレタリア美術家同盟に参加し、運動にかかわる。美術研究所の講師を勤めたり、政治漫画を描いて「戦旗」「ナッブ」「美術新聞」で活躍。同志で画家の新井光（本名・笹子智江）と結婚。弾圧で運動が壊滅したあと、1939（昭和14）年夫妻で渡米、アメリカに帰化（亡命との表現も有）。ニューヨークで画学生となる。太平洋戦争開始後、日本軍部を批判した作品が認められ、OWI（戦時情報局）に勤務。1943年八島太郎の名で自伝絵物語《The New Sun（あたらしい太陽）》を刊行の後、OSS（戦略作戦局）宣伝班に参加し、日本兵士への投降勧告ビラを製作。1947年続編『水平線はまねく』（翻訳は1978、1979晶文社刊）を出版。1953年故郷を舞台にした『村の樹』（1983白泉社刊）で絵本作家としてデビュー。うすのろといわれていた子どもが教師の力で個性的な子に成長していく姿を描いた『からすたろう』（1955 偕成社刊は1979）、三歳の誕生日にあまぐつとあまがさを贈られた女の子の心理を描いた『あまがさ』（1958福音館書店刊は1963）、現代の子どもたちの「浦島太郎」観を描いた『海浜物語』（1967 白泉社刊は1983）など、いずれもものの本質をとらえた迫力のある描写で、情感豊かな色彩に故郷への熱い思いが塗り込められている。三作ともコールデコット賞（アメリカの絵本に与えられる最高の年間賞）次席となる。一方1972年フランスのデヴィユ国際美術展において、『吹雪の怒』『児童・春夏秋冬』などの作品六点をもって、グランプリ・大賞画家となる。1977年、脳溢血で倒れ、療養のかたわら、八島美術研究所の教鞭をとり、自由律句の会「やからんだ乃会」を主宰。

—参考資料—

〔現代日本〕朝日人物事典 朝日新聞社発行）

（日本児童文学大事典 第二巻 大日本図書株式会社発行）

How to 読書感想文

平成26年度から、原稿用紙5枚以上だった読書感想文を3枚以上に減らしました。2枚減らしたことで、少しは負担が軽減したのではないのでしょうか？ それでも相変わらず、「感想文を書くのが苦手！」「苦手というより、むしろキライ！！」という人は多いようです。図書館にも「何を書けば良いのかわからない…」という相談が多く寄せられますが、本を読んで感じたこと、思ったことを書くのが「感想文」です。よく「あらすじ紹介文」を書いてくる人がいますが、工夫しだいで立派な感想文になります。コツや注意点を紹介しますので、参考にしてください。

(1) 本のストーリーのあらすじを紹介しつつ、自分の感想をはさみこんでいく。

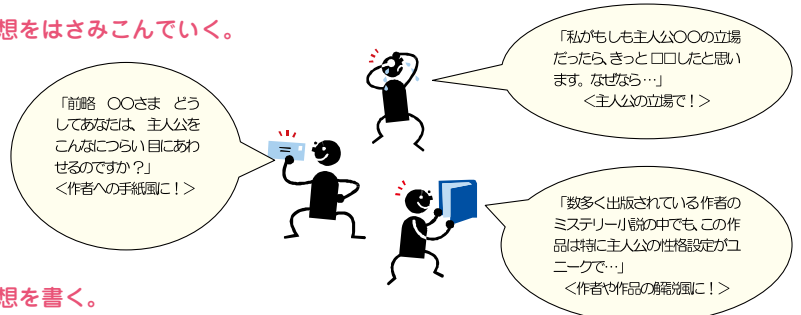
- ①自分が、その立場に立ったら…として書く。
- ②自分の生活や体験と比較して書く。

(2) 誰か特定の人物に宛てて感想を書く。

- ①作中の人物に語りかけて書く。
- ②作者に手紙調で訴えかけて書く。
- ③友人にその本を読むことを薦めて書く。

(3) 同じ系統の本と比較したり、作者について調べて感想を書く。

- ①同じようなストーリーの本と比較して書く。→「恋愛もの」「ミステリー」「ノンフィクション」など。
- ②同じ作者の作品を調べ、指定の作品を位置づける。



《以下の8点は必ず守りましょう！》

- (1) 文字は、ていねいに、わかりやすく書いているか。
- (2) 誤字、あて字、脱字、送り仮名の間違いはないか。
- (3) 文のおわりが「である・だった」調と「です・ます・でした・ました」調の併用になっていないか。(どちらかに統一する)
- (4) 段落分けがきちんとできているか。
- (5) 作品のテーマは何であるか、また作品全体からどのような感銘を受けたかについて記述しているか。
- (6) 作品と自分とのつながりに触れているか。
- (7) 引用した文章について、その出典先の情報はもれていないか。
- (8) 自分の名前や学科名を書いているか。

話しことばと書きことば、
ごちゃまぜになっていませんか？

課題図書には、映像化された作品が含まれていることもあります。本を読むのが苦手な人は映像作品(DVD)を観てしまいがちですが、必ず原作(課題図書)も読んでください。映像作品の中には、原作と異なる人物やシーンが出てくることもあります。原作をきちんと読んでいないと違いがわからず、感想文に矛盾が生じてしまいます。原作を読まずに書いた感想文は書き直し対象です。また、作品中の文章を引用する際は「」でくくり、自分の文章と区別しましょう。黙って使用したら「盗作」になります。こちらも書き直し対象です。気をつけましょう。

参考文献：松尾 弥太郎 編 「読書感想文指導の実際」 共文社 発行>

読書感想文・課題図書より

この目録は、Ⅰ 回生対象の平成26年度読書感想文・課題図書の一部です。Ⅱ 回生にも読んでもらいたい本が推薦されていますのでご紹介します。

書 名	著 者 名	発行所	分類番号
こころの処方箋	河合 隼雄	新潮社	159
わたしが子どもだったころ (1)(2)(3)	NHK「わたしが子どもだったころ」制作グループ 編	ポプラ社	281
一生一途に —94歳正造じいちゃんの戦争体験記と57年間のまんが絵日記	竹浪 正造	廣済堂出版	289.1
自分を愛する力	乙武 洋匡	講談社	289.1
わたしはマララ —教育のために立ち上がり、 タリバンに撃たれた少女	マララ・ユスフザイ クリスティーナ・ラム	学研パブリッシング	289.2
「老いる」とはどういうことか	河合 隼雄	講談社	367.7
ここ —食卓から始まる生教育	内田 美智子	西日本新聞社	367.9
あなたの夢はなんですか？私の 夢は大人になるまで生きることです。 そのとき少女はこう答えた。	池間 哲郎	致知出版社	369.4
幼児期 —子供は世界をどうつかむか	岡本 夏木	岩波書店	376.11
ソロモンの指環 —動物行動学入門	コンラート・ローレンツ	早川書房	481.78
100万回生きたねこ	佐野 洋子	講談社	726.5

書 名	著 者 名	発行所	分類番号
からすたろう	八島 太郎	偕成社	726.5
耳を澄ませば世界は広がる	川島 成道	集英社	762.1
しあわせ運べるように —CDブック	臼井 真	アスコム	767.4
満月の夜、母を施設に置いて	藤川 幸之助	中央法規出版	911.56
お家さん 上・下巻	玉岡 かおる	新潮社	913.6
県庁おもてなし課	有川 浩	角川書店	913.6
こころ	夏目 漱石	岩波書店 他	913.6
少年H 上・下巻	妹尾 河重	講談社	913.6
せんせい。	重松 清	新潮社	913.6
何者	朝井 リョウ	新潮社	913.6
西の魔女が死んだ	梨木 香歩	新潮社	913.6
博士の愛した数式	小川 洋子	新潮社	913.6
また次の春へ	重松 清	扶桑社	913.6
舟を編む	三浦 しをん	光文社	913.6
窓ぎわのトットちゃん	黒柳 徹子	講談社	916
赤毛のアン	L.M.モンゴメリ	新潮社	933
スウ姉さん	エレナ・ポーター	河出書房新社	933

図書館蔵書検索システムについて

図書館の蔵書は、自宅など学外のインターネットからでもアクセスできます。あらかじめ蔵書の有無を調べておくと、本を探す時間が短縮できます。詳しくはカウンターで尋ねてください。

(1) 短期大学ホームページ (<http://www.koshien-c.ac.jp/>) をひらく

(2)  **ピックアップ Pick up** にある



図書館

図書館の開館日程はこちらをご覧ください。
一般の方は館内閲覧が可能です。

をクリックする

(3) 関連リンク (<http://www.koshien-c.ac.jp/about/facilities/library.html>) をクリックする

(4) 「蔵書検索システム (OPAC)」をクリックする

蔵書検索

本学所蔵の資料は、学内外のパソコンからも検索できます。検索方法など、何かわからないことがあれば、カウンターで尋ねてください。
「蔵書検索システム (OPAC)」 

(5) **簡易検索**で

①「フリーワード」の欄に検索したい言葉を入力する
(例：介護、栄養、絵本など)

※「フリーワード」欄は「タイトル」「著者名」「請求記号」などに変更することも可能
変更したい場合は  をクリックして選択

② 検索対象を「全学」から「短大」に変更する
例えば「介護」で検索してみると・・・

※タイトルは「甲子園大学 図書館」になっていますが、短期大学の蔵書検索もできます



「介護」関係の本が**262件**
ヒットしました！

「認知症」関係の本が**14件**
まで絞り込めました！

(6) **絞り込検索** を使って検索範囲を指定すれば、**262件**を**14件**まで絞り込むことも可能

(7) 蔵書検索結果一覧から必要な図書情報を選んでクリック

さらに「認知症」で絞り込むと・・・



(8) 書架から図書を探す

(9) 貸し出し手続きをとる

利用状況が「保管中」になっていれば、貸し出し可能
「貸出中」になっていれば、カウンターで予約申し込みをしてください

新着図書紹介目録

この目録は、平成26年4月から9月にかけて図書館で購入した図書135冊のうち、各学科の先生方がぜひ皆さんに読んでほしいと推薦された図書の
一覧です。分類番号の見方は、館内掲示の「本の探し方」を参照してください。

書 名	編著者名	発行所	分類番号	書 名	編著者名	発行所	分類番号
今がわかる時代がわかる世界地図 (2014年版)	成美堂出版株式会社	成美堂出版	290.38	「和」の行事えほん(1) 春と夏の巻	高野 紀子	あすなろ書房	386.1
公務員試験速攻の時事 (平成26年度試験完全対応)	資格試験研究会 編	実務教育出版	317.4	「和」の行事えほん(2) 秋と冬の巻	高野 紀子	あすなろ書房	386.1
日商PC検定試験 「文書作成」2級 模擬問題集	富士通オフィス機器	FOM出版	336.57	暮らしのならわし十二月	白井 明大	飛鳥新社	386.1
図解 相手の気持ちをきちんと 「聞く」技術 －会話が続く、上手なコミュニケーションができる！	平木 典子	PHP研究所	361.45	ほんとの植物観察(1) ヒマワリは日に回らない	室井 綽 他	地人書館	470.7
少子高齢社会総合統計年報 2014	三冬社編集部 編	三冬社	365.5	ほんとの植物観察(2) 庭で、ベランダで、食卓で	室井 綽 他	地人書館	470.7
介護福祉士国家試験受験ワークブック 2015上・下	介護福祉士国家試験受験ワークブック編集委員会 編	中央法規出版	369	植物は人類最強の相棒である	田中 修	PHP研究所	471
U-CANの介護福祉士これだけ！ 一問一答集(2015年版)	ユーキャン介護福祉士試験研究会 編	ユーキャン	369.17	やあ！ 出会えたね ダンゴムシ	今森 光彦	アリス館	486
介護福祉士国家試験過去問解説集<2015> 第24回～第26回全問完全解説	介護福祉士国家試験受験対策研究会 編	中央法規出版	369.17	介護職・福祉職のための医学用語辞典(改訂)	大森 正英 編集代表	中央法規出版	490.33
見て覚える！ 介護福祉士国試ナビ(2014)	いとう総研資格取得支援センター 編	中央法規出版	369.17	社会脳とは何か	千住 淳	新潮社	491.371
あなたを助ける介護記録100% 活かし方マニュアル －ただ書くだけの記録からケアを高める記録に	高頭 晃紀	メディカ出版	369.26	脳科学からみる子どもの心の育ち －認知発達にのルーツをさぐる	乾 敏郎	ミネルヴァ書房	491.371
現場から生まれた介護福祉施設の災害対策ハンドブック	山田 滋	中央法規出版	369.26	イラストでわかる高齢者のからだと病気	杉山 孝博	中央法規出版	493.18
はじめてでも怖くない自然死の看取りケア －穏やかに自然な最期を施設の介護力で支えよう	川上 嘉明	メディカ出版	369.26	食生活データ総合統計年報 2014	三冬社編集部 編	三冬社	498.5
保育用語辞典[第7版]	森上 史朗 柏女 霊峰 編	ミネルヴァ書房	376.1	調理師試験問題と解答 (2014年版)	日本栄養士会 編	第一出版	596.07
スィスイわかる保育士採用教養試験(2015年度版)	保育士採用試験情報研究会 編著	一ツ橋書店	376.14	緑のカーテンの育て方 －イラストでわかりやすい！	島田 有紀子	NHK出版	629.75
スィスイわかる保育士採用専門試験(2015年度版)	保育士採用試験情報研究会 編著	一ツ橋書店	376.14	フードコーディネーター用語集 －3級資格認定試験対応	日本フードコーディネーター協会 編	柴田書店	673.9
保育士・幼稚園教諭採用試験問題集(2015年度版)	保育士試験研究会 編	実務教育出版	376.14	ぐりとぐらのしりとろうたとおまじない(全2巻)		福音館書店	726.5
Gakken保育books 自然＊植物あそび一年中 －毎日の保育で豊かな自然体験！	出原 大	学研教育出版	376.154	ほぼにちの絵本 かないくん	谷川 俊太郎 他	東京糸井重里事務所	726.5
すごい！ふしぎ！おもしろい！ 子どもと楽しむ自然体験活動 －保育力をみがくネイチャーゲーム	日本ネイチャーゲーム協会 監修	光生館	376.154	子どもと森へ出かけてみれば	小西 貴士	フレーベル館	748
使える！保育のあそびネタ集 歌あそび編	井上 明美 編著	自由現代社	376.157	子どもは子どもを生きています	小西 貴士	フレーベル館	748
使える！保育のあそびネタ集 室内あそび50	井上 明美 編著	自由現代社	376.157	こどものうた12か月 －年齢別声域配慮版	井上 勝義 編著	ひかりのくに	763.2
使えるネタセレクション 保育の“ワイワイ” うたあそび	井上 明美 編著	自由現代社	376.157	こどものピアノ連弾名曲集(1) (バイエル～ブルクミュラー程)	森 千尋	全音楽譜出版社	763.2
学年ピリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話	坪田 信貴	KADOKAWA	376.8	こどものピアノ連弾名曲集(2) (ブルクミュラー～ヘンナチネ程)	森 千尋	全音楽譜出版社	763.2
こどもの手話ソング集 －園児から小学生・先生から親まで… いろいろなイベントに大活躍！	民衆社編集部 編	民衆社	378.28	CD＋楽譜集 こどもの器楽合奏大全集 (クリスマス)	デプロ	デプロ	764
				はじめてのえいごのおうたえほん たまひよおうた絵本		ベネッセコーポレーション	767.7
				漢検過去問題集 1／準1級・2級・準2級 (平成26年度版)	日本漢字能力検定協会 編	日本漢字能力検定協会	811.2
				徘徊と笑うなかれ	藤川 幸之助 詩 岡田 知子 絵	中央法規出版	911.56
				96歳。 今日を喜ぶ。一人をたのしむ	吉沢 久子	海竜社	914.6

読書感想文 入選者と書名

- ★優秀作 幼児教育保育学科 1組17番 掛水 美来 「からすたろう」
 ★佳作 幼児教育保育学科 1組34番 増田 千紘 「100万回生きたねこ」

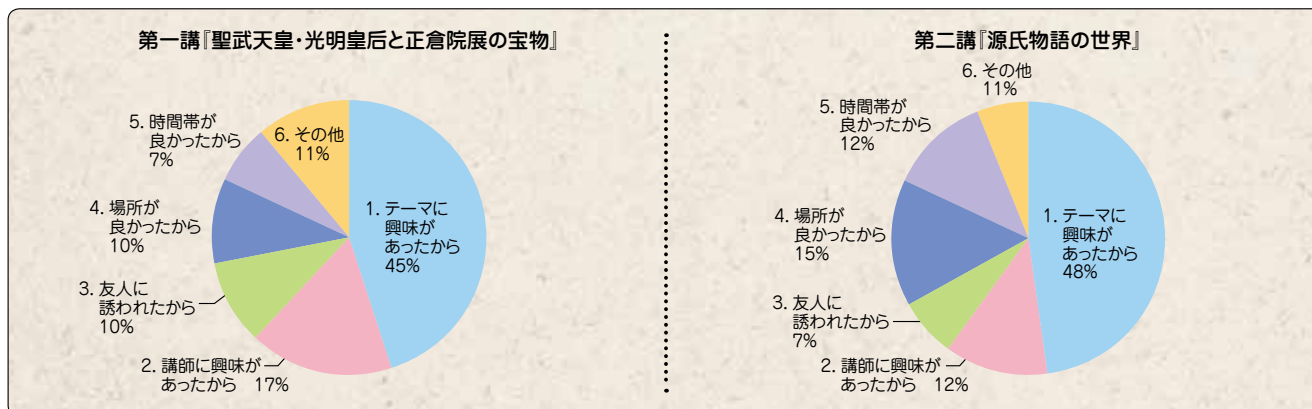


開学50周年記念附属図書館公開講座参加者アンケート結果

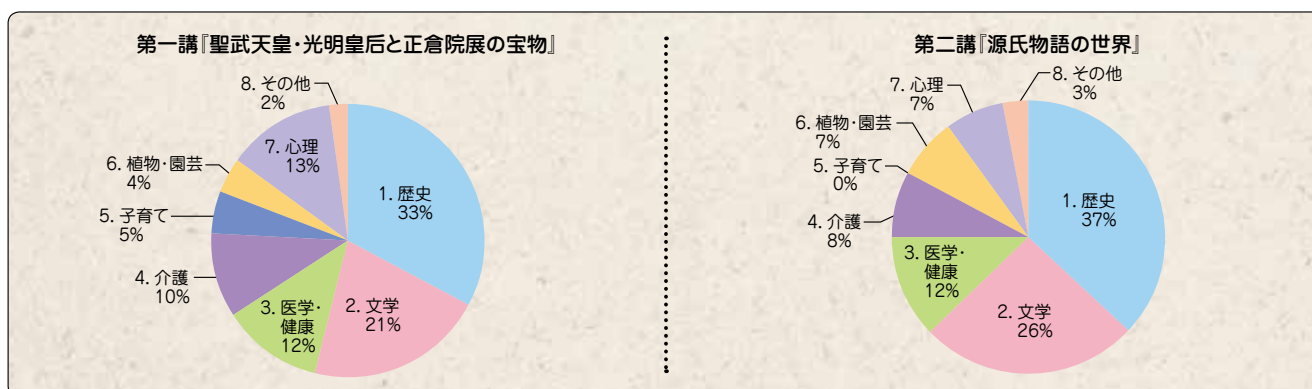
両日を合わせると200名近い参加者があり、盛況のうちに終わることができました。ここで改めてご協力をいただいた学院関係の方々に御礼を申し上げる共に、参加者の感想をご紹介します。

9月27日(土) 第一講 テーマ『聖武天皇・光明皇后と正倉院展の宝物』・・・参加者109名(アンケート提出73名)
 10月4日(土) 第二講 テーマ『源氏物語の世界』・・・参加者82名(アンケート提出37名)

●講座に申し込まれた理由をお聞かせください。



●今後どのような講座があれば、参加してみたいと思われますか？



上記のグラフからもわかるように、参加者は歴史や文学に興味を持っている方ばかりでした。自由記入の感想でも、次回に期待してくださるお声が多く寄せられ、地元西宮に関する歴史やゆかりの植物についての講座へのリクエストもありました。「貴重な映像資料を見せていただき、今秋公開の正倉院展に行きたくなった」「仲麻呂などの自筆の文字を見て、時空を越えた歴史が身近に感じられた」「興味深い内容の講義を拝聴し、京都で紫式部や藤原氏にまつわる土地を巡りたくなった」「藤原道長の政治に関する考え方や攻略を織りまぜての講座で、大変おもしろかった」など、講座内容にとても満足していただけたようで、「今回の公開講座に参加して、甲子園短大が

すごく身近に感じられるようになった。地域に根ざした今後の活躍を！」「回数を増やしてシリーズ化してほしい」といったお声もありました。

あ・と・が・き

『図書館ニュース』も本号をもって、第50号を迎えました。本学の開学50周年という記念の年に、偶然のこととはいえ第50号を刊行することができたことはとても嬉しいことです。本学がこの地に呱呱の声をあげたのは昭和39年、それ以来、学院長久米利男先生・特別顧問久米多香子先生をはじめ、理事長久米知子先生を中心とする多くの教職員の方々のご努力がありました。図書館でも、開学50周年を記念して公開講座を開催するとともに、本学そして学院のご理解のもとに第50号を記念号とすることにいたしました。そこで従来の内容に加えて、公開講座の要旨はもとより、歴代の図書館長や旧教員の諸先生にも図書館に関する思いをご寄稿いただきました。今後も学生のためにより充実した図書館運営を続けてゆくように努力する所存でございますので、どうかご協力をお願い申し上げます。(館長・木本好信)



編集発行

甲子園短期大学図書館

〒663-8107 西宮市瓦林町4-25

TEL.0798 (65) 3300 / FAX.0798 (67) 9101